

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Association Between Maternal Caffeine Intake During Pregnancy and Child Development at 6 and 12 months: Prospective Birth-cohort Analysis of the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

妊娠中の母親のカフェイン摂取と生後6ヶ月/12か月の子どもの発達との関連

ユニットセンター(UC)等名: 北海道ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Early Human Development

年: 2022 DOI: 10.1016/j.earlhumdev.2022.105607

筆頭著者名: 西原 進吉

所属 UC 名: 北海道ユニットセンター

目的:

妊娠中の母親のカフェイン摂取量が、乳幼児期の子どもの発達と関連するか否かについて、先行研究ではほとんど検討されておらず、明らかではない。そこで、本研究では、エコチル調査で収集されたデータを用いて、この関連を検討した。

方法:

エコチル調査に参加する子どものうち、母親の妊娠中の食物摂取頻度調査への回答及び、生後6ヶ月もしくは12か月のASQ日本語版(The Japanese version of the Ages and Stages Questionnaire)への回答があり、かつ、先天異常等がなく、出産時のアプガースコアが7以上だった87,106名を解析対象とした。妊娠中のカフェイン摂取量は、食物摂取頻度調査への回答から推計し、子どもの発達状況についてはASQ日本語版を用いて評価し、これらの関連を検討した。

結果:

その結果、1日に300mg以上カフェインを摂取した母親から生まれた子どもは、最もカフェイン摂取量が少なかった群の母親から生まれた子どもと比較して、生後12か月の段階で、座る、歩く、立つなどの身体全体を使った動き(粗大運動)の発達に遅れがみられる割合が高かった。

考察(研究の限界を含める):

先行研究では、妊娠中の母親のカフェイン摂取と、生まれた子どもの乳幼児期の発達の関連について明らかでなかったが、本研究の結果は、妊婦のカフェイン摂取量が多いと、生後12か月において、子どもの粗大運動に遅れが出現する可能性を示唆するものだった。ただし、本研究では、正確に発達を評価することが困難な乳幼児期の子どもに焦点をあてており、その発達評価は専門家ではない保護者の質問票への回答に基づいているため、この部分の精度が十分には担保されていない可能性がある。

結論:

乳幼児期の粗大運動発達の問題は、将来の出現する発達の問題の兆候になりうることが指摘されている。したがって、本研究に参加した子どもたちの転帰を含め、より年長の子どもの発達の問題に関するさらなる研究が必要である。